

## 沖縄県辺戸岬, 三宝山付加コンプレックス今帰仁層の層序と地質構造

## Stratigraphy and geologic structure of Nakijin Formation of Sambosan accretionary complex in Hedo-misaki area, Okinawa

# 安田 知佳 [1]; 山口 真理子 [1]; 尾上 哲治 [2]

# Chika Yasuda[1]; Mariko Yamaguchi[1]; Tetsuji Onoue[2]

[1] 鹿児島大・理; [2] 鹿児島大・理・地球環境

[1] Science, Kagoshima Univ.; [2] Earth and Environmental Sci., Kagoshima Univ

三宝山付加コンプレックスは西南日本外帯の秩父累帯南縁部を占め、トリアス紀海山の衝突・付加で形成されたジュラ紀新世～白亜紀古世付加コンプレックスと考えられている。三宝山付加コンプレックスは、幅数 km ながら関東山地から九州まで 1000 km 以上にわたりほぼ連続的に追跡され、南方延長は沖縄本島最北端の辺戸岬および本部半島で確認される。従来の研究から、沖縄本島に分布する三宝山付加コンプレックスは、暗灰色層状石灰岩という特徴的な岩相を持つ今帰仁(なきじん)層として知られているが、その詳しい層序や地質構造については分かっていない。本研究では、沖縄本島最北端の辺戸岬周辺に分布する三宝山付加コンプレックス今帰仁層の石灰岩岩体について、岩相層序及び地質構造の研究を行った。

調査地域である辺戸岬の北部には、低角度衝上断層の仏像構造線を介して三宝山付加コンプレックスの石灰岩が北東南西方向に分布する。本地域の石灰岩は、今帰仁層の層状石灰岩と、ネクマチチ岳層の塊状石灰岩とに区分される。両者の境界は低角度、北フェルゲンツの衝上断層によって境され、今帰仁層の構造的上位にネクマチチ岳層が重なる。本研究では、この衝上断層を、辺戸御嶽(うたき)衝上断層と命名した。

今帰仁層(層厚 460 m 以上)は、岩相の特徴から、暗灰色層状石灰岩からなる下部層(層厚 110 m)、碎屑性石灰岩優性の中部層(層厚 180 m)、碎屑性石灰岩とスランプ堆積物で特徴付けられる上部層(層厚 110 m)、暗灰色層状石灰岩の最上部層(層厚 50 m)に区分される。下部層は単層の厚さ 30~80cm の暗灰色層状石灰岩で構成され、単層間に厚さ 10~30 cm の石灰質頁岩が挟まれる。中部層は暗灰色層状石灰岩中に厚さ 5~20 cm の碎屑性石灰岩が挟まれることで特徴づけられる。碎屑性石灰岩には、タービダイトに特徴的な級化構造や平行・斜交葉理がみられる。上部層は主に碎屑性石灰岩からなり、厚さ約 3 m のスランプ堆積物が数層準に挟まる。最上部層は、下部層と同様に暗灰色層状石灰岩で構成される。また、上部層と最上部層の間には、厚さ約 10 m の玄武岩質火山碎屑岩層が挟まれる。ネクマチチ岳層(層厚 200 m 以上)は、明灰色塊状石灰岩から構成される。塊状石灰岩は再結晶化が著しく方解石の脈が発達しており、初生的な堆積構造や化石片はみられなかった。

今帰仁層の層状石灰岩からはトリアス紀新世カーニアンのアモンナイト化石が報告されている(石橋, 1974, 地質雑, 80, 329)。本研究では、さらに詳しい年代決定のため、今帰仁層の層状石灰岩およびネクマチチ岳層の塊状石灰岩からコノドント化石の抽出を試みたが、発見することができなかった。

従来の研究では、辺戸岬に分布する石灰岩類は、塊状石灰岩の上位に層状石灰岩が不整合に累重すると考えられており、両石灰岩は共に今帰仁層とされてきた。しかし、本研究では塩基性安山岩の存在は認められず、低角度の衝上断層を境にして、今帰仁層の層状石灰岩の上位にネクマチチ岳層の塊状石灰岩が構造的に累重するということが明らかになった。